鳳凰殿の形態とその成立要因について

THE FACTORS SURROUNDING THE FORM OF THE HŌ-Ō-DEN IN THE WORLD'S COLUMBIAN EXPOSITION IN CHICAGO, 1893

三島 雅博*
Masahiro MISHIMA

The Japanese pavilion named Hō-ō-Den was set up in the exposition in Chicago, 1893 and modeled on the holy edifice, Hō-ō-Dō (Phoenix Hall) erected about 1052 at Uji near Kyoto. It consisted of three buildings showing each different artistic periods to represent the history of Japanese art. Though it didn't represent the essence of Japanese architecture and art ideally because of political intention and restriction on program, it showed Japanese beauty of her historical architecture and art in the limitation as a pavilion in the exposition.

This paper reports on the factors surrounding the form of the Hō-ō-Den.

Keywords : *Hō-ō-den, Kakuzo Okakura, exposition, Japanese-style, Ryūichi Kuki, Japanese art*

鳳凰殿, 岡倉天心, 万国博, 伝統的日本建築, 九鬼隆一, 日本美術

I. はじめに

鳳凰殿は、明治26年(1893)にシカゴで開催された万国博(以下「シカゴ博」と呼ぶ)の日本館で、鳳凰堂をモデルとして久留正道が設計し、平安中期・室町・江戸の各々の時代¹⁾を表現した三棟の建物からなる。また、建設に関係した重要人物としては、久留以外にもシカゴ博へ参加するために組織された臨時博覧会事務局(以下「事務局」と呼ぶ)副総裁九鬼隆一、同事務官山高信離、同評議員岡倉覚三(天心)らが特筆される。

建設の経緯については前稿で報告したが²⁾、本稿ではその形態が決定されてゆく過程を探り、モデルに鳳凰堂が選ばれたことや、表現された三時代が平安中期・室町・江戸となった理由について論じたい。

鳳凰殿の形態形成には、後で述べるように政治的な要因などが大きく関係していた。しかし、前稿で述べたように建設目的に、建築美の表現や内部の展示で日本美術の変遷を表すことがあり、建築形態や表現する時代の選択には、関係者の建築史観や歴史的美術に対する評価や思想(以下「美術史思想」とする)が影響していた筈である。ところが、先に挙げた人物のうち、建築史観が知られるものはおらず、久留は後で述べるように日本館のモデル選定に深く関与していなかったようである。また、美術史思想についても、九鬼と山高は日本館の計画段階で調査を行った帝国博物館の総長と理事であり、重要な役割を果たしていたと考えられるが、彼らの美術史思想

を知る史料に乏しいことから³⁾、それを把握することは難しい。しかし、岡倉は前稿で述べたように、九鬼や山高以上に鳳凰殿の形態形成に重要な役割を果たしていたと考えられる。さらに、岡倉が東京美術学校で行った授業の筆記録『日本美術史』⁴⁾は、鳳凰殿の設計時期とほぼ一致するものであり、その中で各時代の美術を評価するだけでなく、日本美術の特質にも触れるなど、当時の彼の美術史思想がよく現れている。また、当時の岡倉と九鬼は「同心一体」⁵⁾とまで形容されるほどであるから、両者の美術史思想に大きな隔たりはなかったと考えられ、岡倉と山高の関係についても、二人とも九鬼の許で活動する間柄であったから、この両者の場合も美術史思想的に相入れぬものであったとは思われない⁶⁾。

これより、鳳凰殿の形態形成における美術史思想的背景の多くが、岡倉の『日本美術史』より考察することが可能と考えられる。

なお、本稿で使用した資料は、この『日本美術史』の他、日本政府のシカゴ博についての正式報告書『臨時博覧会事務局報告』(臨時博覧会事務局、明治28年)(以下『報告書』と呼ぶ)、岡倉や久留が鳳凰殿について述べた文章、『官報』、当時の新聞⁷⁾などを用いた。

II. 鳳凰殿の内容

日本館は鳳凰堂をモデルとして建てられ、「鳳凰殿」と名付けられた。岡倉は、鳳凰殿の英語による解説書で

* 神戸大学大学院 大学院生

Graduate Student, Graduate school of Kobe Univ.

ある『THE HŌ-Ō-DEN』⁸⁾(以下『英語解説書』とする)を執筆しており、その中で鳳凰堂について説明した後、鳳凰殿について以下のように述べている。

“The Hō-ō-Den now exhibited is substantially a replica of the edifice at Uji, somewhat smaller in size and modified to adapt it for secular use.”

訳：いくらかの縮小と現実的な使用に対応するために修正されているが、ここに展示した鳳凰殿は実質的に宇治にあるその寺院の模造である。

しかし、現実には鳳凰殿は鳳凰堂の単なる模造ではなく、平安中期、室町、江戸の三時代を表現した三棟の建物からなっていた。

鳳凰堂ノ様式ニ則リ一聯三棟ノ家屋ヲ建築シ而シテ其内部ノ裝飾ハ藤原足利徳川ノ三時代ニ符合スルモノヲ施シ(略)
 『報告書』第四章第二十款鳳凰殿]

ところで、全体のモデルとして鳳凰堂があったが、三時代を表したそれぞれの建物にもモデルが存在した。

『報告書』では、左翼の平安中期を表現した棟は、基本的には鳳凰堂の様式に基づき、寝殿造を組み入れたものの、右翼の室町時代を表現した棟は、当時の書院と茶室を再現したもの、左右の建物の約2倍の面積を持つ⁹⁾中央の江戸時代を表現した棟は、八代将軍の頃の大名屋敷を再現したものとしている。

左方藤原時代ノ宮殿ハ当代ノ建築ニ係ル宇治ノ鳳凰堂ニ基キテ大體ノ形式ヲ取り之ニ參配スルニ公卿貴人ノ建築ヲ以テセシモノニシテ(略)

右方足利時代ノ建物ハ当代ノ書院ト茶室ヲ現セルモノニシテ(略)

中央ナル徳川時代ノ建物ハ總テ当代諸侯ノ邸ヲ写シタルモノナリト雖モ其室内ノ裝置ハ全ク八代将軍ノ時代ニ於ケル大名ノ邸宅ニ擬シ(略)

『報告書』第四章第二十款鳳凰殿]

『英語解説書』は設計を担当した東京美術学校の校長である岡倉が著したものであるところから、モデルがより具体的に述べられている。

平安中期の棟について、

“The left wing of the Hō-ō-Den here erected is constructed in accordance with the principal architectural features of the Fujiwara epoch, specially copied from the Phoenix Hall at Uji, and from the apartments of the Imperial Palace at Kyoto”

訳：ここに建てられた鳳凰殿の左翼は、藤原時代の建築的特徴に則りながら建設されており、特に宇治鳳凰堂と京都御所を真似ている。

また、室町時代の棟については

“As a characteristic representation of the art of this epoch, the interior reproduces, with but slight changes, a room in Gin-kaku-ji (Silver Pavilion)”

訳：この時代の美術の特徴的な表現として、その内装は僅かな変更はあるが、銀閣寺(シルバー・パビリオン)の一室を再現している。

江戸時代の棟は

“The hall is a replica of a room in the old castle of Yedo (Tokyo).”

訳：その堂は江戸(東京)の古城の一室の複製である。

と、述べられていた。これより、それぞれの棟のモデルは、平安中期は鳳凰堂と京都御所、室町時代の内装は銀閣寺、江戸時代は単なる大名屋敷ではなく、江戸城であったことがわかる。

しかし、前稿でも述べたように、設計にあたった久留は、各棟の外観をそれぞれの時代の様式で正確に再現したのでは全体としての建築表現を生み出すことはできないと判断し、各時代の意匠に変更を加えている。

廊下ハ全ク藤原氏ノ時代ノ製デアリマスガ即チ丸柱デ廊下ニ高欄カツイテオリマス徳川幕府ノ建築ニハ高欄ハナイ併シナガラ藤原氏ハ高欄ガアル夫レデ余儀ナク徳川足利ニモ高欄ヲ附ケテ同様ニ見ヘル様ニシマシタ

【久留正道「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」『工学会誌』(M 26.10)]

本来、室町や江戸時代の縁には高欄が無いのを知りながらも三棟とも高欄付としたのは、平安中期の棟に合わせた結果であるとしている。この他にも室町時代の棟の舞良戸を平安中期の棟の部に合わせて格子状のものに変え、平安中期や室町時代の建物は通常檜皮葺か藁葺であるのを、三棟とも銅板葺にした¹⁰⁾ことなどを証言しており、全体として「同様ニ見ヘル」ようにしたのである。

『英語解説書』の最後で、岡倉は以下のように述べている。

“The building of the Hō-ō-den are built of unpainted wood, and principles of Japanese construction and proportion are wholly adopted.”

訳：鳳凰殿の建物は素木で建てられ、日本建築の構造と比例の原理が全面的に採用されている。

三時代を表現しながらも、外観的にはまとまりのある形態を示した鳳凰殿は、日本建築独自の美を表現するものであると岡倉は考えていたようである。

Ⅲ. 日本館計画の推移

日本館は、計画当初から鳳凰堂をモデルとしたものではなく、様々な過程を経て形態は決定されており、このことは鳳凰殿の形態を考察する上で重要である。

『報告書』によれば、日本館を建設するに際して鳳凰堂と金閣寺のいずれかをモデルとすることになり、調査の結果、鳳凰堂に決定したとしている。

初メ右ノ古代家屋ノ形状及ヒ其内外ノ裝飾ハ金閣寺ト鳳凰堂トノ二様ニ就キ其一ヲ選択スルコト、ナシ調査ノ末鳳凰堂ニ決シ(略)『報告書』第四章第二十款鳳凰殿]

『報告書』には、鳳凰殿の形態形成の過程を伝える記述はこれだけであり、充分ではない。さらに重要な点は、モデルが最終的に決定する以前の段階では、金閣寺がより有力な候補であったような形跡が見られることである。これを当時の新聞などの資料から追ってみる。

Ⅲ-1 日本館の計画の開始

設計者久留が鳳凰殿の工事の為にシカゴへ出発する前に工学会で行った「演説」¹¹⁾は、その形態が決定するまでの経過をよく伝えている。それによれば、日本館の計画が開始されたのは、明治24年9月頃であった。

ま
作年ノ九月カラ其話ガ起ツテドウモ今時ノ家ヲ出品シテハ面白クナイカラ日本ノ古代ノ家ヲ出品シヤウジアナイカサウシテころんぶすが垂米利加ヲ発見シタ頃ノ家が宜カラウカラ其時分ノ家ヲ出品シヤウジヤナイカト云フ説ガ起ツタ其頃ノ建築ハ宜イコトニハ皆美術的ノ建築テアルカラ…サウ云フコトガ分ツタラ寧ロ時代ニ分ケタラ宜カラウト云フコトヲ帝国博物館ニ於テ色々取調ベラシテ之ヲ徳川、足利、藤原ノ三時代ノ建築ニシヤウト云フコトニナリマシタ

〔久留前掲「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付イテ」〕

これより、まず歴史的様式に基づいた日本館を出品することとなり、次いで、その様式をコロンブスがアメリカ大陸を発見した時代のものとしようとしたことがわかる。コロンブスのアメリカ大陸発見が1492年であるから、これは室町時代と考えられる。しかし、その時代の建築は「美術的」なものであるから、それならば時代分けをして建物を出品したほうがよいということになった。そこで帝国博物館が表現する時代の調査を行い、選ばれたのが江戸、室町、平安中期の三時代であった。

時代が決まった後、それをどのように表現するかが問題となるが、当初は一棟の建物で三時代を平面的に分けて表す案が考えられた(図-1)¹²⁾。「演説」の内容から、この案は久留が作成したのではないことがわかるが、それでも詳しく説明しており¹³⁾、計画がある程度進んだものであったことがわかる。しかし、この案は久留が述べるところの「刺身ノ脇ニ以ツテ往ツテ館テモ附ケルヤウナ」ものであり、これでは建築美を表現することは叶わず、前稿でも述べたように九鬼の判断で実在の古建築をモデルにして日本館を設計することになった。その結果選ばれた古建築が金閣寺と鳳凰堂で、この選定は明治

図-1 計画当初の日本館平面図〔久留正道「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付テ」『工学会誌』(M 26.10)より〕

24年12月初めまでになされている¹⁴⁾。

Ⅲ-2 敷地獲得から設計終了まで

同年12月28日には、米国博覧会事務局との種々の交渉の為に、事務官手島精一がシカゴへ出発する。この時の交渉に日本館の敷地請求が含まれていた。日本が請求した敷地はジャクソン・パーク内のウーデッド・アイランドで、前稿で述べたように敷地獲得交渉は難航したが、その理由の一つとして建物自体の問題があった。日本の事務局は日本館を博覧会終了後シカゴ市へ寄贈する計画であったので、そのことがまず問題となり、次いで建物の高さが問題となった。会期終了後、その敷地はシカゴ市管轄の公園となるため、手島の交渉相手は米国側事務局だけでなくシカゴ市公園委員会にまで及び、建物の形状などを説明した結果、低い建物であることを条件に日本館の敷地とする許可が与えられた¹⁵⁾。日本館の敷地が確定したことを伝える新聞記事は、日本では翌25年2月25日の紙上に載せられており、交渉はこの時迄に終了していたことがわかる。

これと前後するが、日本館の計画が企画段階から設計段階に移るのは、東京美術学校に設計が依頼されてからと考えられる。同校の明治25年度の年報には、鳳凰殿の設計に関連した記述として、以下のものがある。

(一月)二十日文部省ヨリ閣龍世界博覧会へ本校ヨリ出品費用トシテ農商務省ヨリ配付ノ金二千七百円交付セラレ乃絵画科彫刻科美術工芸科中彫金鍍金蒔絵等ノ諸科へ右金額分配各科出品ノ準備ニ著手セリ(略)

三月八日兼テ達セラレタル閣龍世界博覧会へ臨時博覧会事務局ヨリ本邦家屋出陳ニ付其構造並ニ室内装飾等ノ設計ニ付取調書ヲ上申ス尋テ室内装飾工事ノ委託ヲ受ケ該製作ニ着手セリ(括弧内は筆者による)〔東京美術学校第四年報「處務」¹⁶⁾〕

また、同年2月26日の『読売新聞』の記事「宇治の鳳凰堂」では、他紙より一日遅れて日本館の敷地確定を報じているが、同時に東京美術学校で日本館の設計中であることも記している。

これらから、東京美術学校内に於いて1月22日に少なくとも日本館で展示する美術品等の準備だけは開始されており、2月25日迄には建物自体の設計も依頼され、敷地獲得にともない計画は企画段階を脱し、3月8日には取調書を上申していることから、実施設計の態勢に入ったと思われる。

次いで4月23日、久留正道は「家屋建築工事監督」を事務局より囑託されている¹⁷⁾。

5月17日の各新聞は、日本館の施工が日本土木会社に決まったことを報じているが、注目すべき点は、この時点で同社が既に深川の工場で工事に入っていることである。ところが、5月23日に米国の博覧会建築部長ダイラン・ゼラルデンより、日本館の建設規模、配置、人夫や材料の到着や着工時期についての問い合わせがあったにもかかわらず、事務局はすぐに回答してい

図-2 鳳凰殿・立面図 [「コロンブス世界博覧会出陳日本建物 縮図」『官報』(M 25.10.21 附録)]

図-3 鳳凰殿・平面図 [「コロンブス世界博覧会出陳日本建物 縮図」『官報』(M 25.10.21 附録)]

ない。ようやく6月23日に手島精一が一応の回答をし、次いで7月2日に建築部長D.H. パーナムに設計図及び説明書を送付し、同時に竣工予定も伝えたのであった。これを受けて、7月23日にはパーナムより米国側の博覧会総裁ジョージ・アール・デヴィスの承認を得たと通知があり、さらに8月10日には日本の事務局総裁に対して、米国側から正式に承認が通告され、これで日本館の設計についての交渉が終了した¹⁸⁾。

5月17日に工事に入っていたことと、同月23日の米国側の問い合わせに対して即座に回答していないという事実から、この時点で設計が完了していたとは断言できないまでも、基本的な部分の設計は終わっていたと見てよいであろう。さらに、遅くとも6月23日もしくは7月2日迄には設計図は完成していた。

Ⅲ-3 日本館のモデルの決定

前述のように、明治24年末の段階では日本館のモデルとして金閣寺と鳳凰堂が挙げられていた。しかし、翌25年になると新聞記事の殆どが日本館は金閣寺を模したものであるとして、それに関する各種の内容を報道し

ており、このことは6月30日にそれが鳳凰堂の模造となることを報じるまで続く¹⁹⁾。この時の報道は各社一斉のものであることから、6月末に日本館の設計がほぼ完了したことで、事務局はその内容について記者発表を行ったと考えられる。この時の報道で注目されるのは、単に日本館のモデルが鳳凰殿となったということだけでなく、金閣寺から変更された理由までも記していることである。

閣龍世界大博覧会へ我政府より歴史的美術品として金閣寺の構造を出品する計画なりしも米国政府より高閣の建築を拒るゝ事となり中途より^{まゝ}奈良鳳凰堂に変更し(略)

〔世界博覧会出品鳳凰堂の構造〕『読売新聞』(M 25.6.30)

これによると、変更理由は米国側から高層の建築物を拒否されたことによるとしている。また、このモデルの変更をいち早く報じた『東京日日新聞』には、興味深い理由が載せられている。

扱この古代建築の出品にて最初金閣寺と極しもの俄に平等院の鳳凰堂の模造へと変へたるを如何にといふに我が事務官の某、彼国へ航つて日本帝国の出品京都の金閣寺と名のりを挙げたるに彼国の委員大いに驚きて左様の大物の御出品此方会

に取り有り難くはあれど少しく迷惑といふべき方にて左程広大なる大伽藍を俄かに建てられては周囲の景色の取り合わせにも差響き各国の出品者の苦情等もあるべき歟といふに、事務官さらばアレに見ゆるウーテッド島彼の全面を我国に貸し與へらるべし左あらば此方にてても四隣の苦情これ無きやうに恰好の物を出品せんと約束したるが此れにより俄に金閣寺にては広大に過ぎたり宜しく鳳凰堂たるべしとの評議になれるなりとかや（略）[XYZ生「米国博覧会に就ての一二（鳳凰堂の事）【東京日日新聞】（M 25. 6. 25）]

記事はこのあと、米国側の委員が勘違いして金閣寺を実際よりもはるかに大きなものと思ひ込んだとのが述べられている²⁰⁾。その内容については疑うべき点もあるが、日本館のモデルの変更と言えるようなものがあつたことは、その理由までも載せられていることからほぼ間違いない。

さらに、敷地確定に際してシカゴ市公園委員会が日本館が低い建物であることを条件とした理由は、『東京日日新聞』が報じるように、交渉時に手島が金閣寺をモデルとした日本館を説明したと考えれば理解がしやすい。もし、最初から鳳凰堂をモデルとした日本館を説明していたとすれば、このような条件は付けられなかったのではないだろうか。

これらの状況より、日本館のモデルは当初金閣寺が有力であつた可能性が高い。それゆえ、事務局から正式の発表はないものの、このことが新聞各社に伝わり報道されていたのであろう。鳳凰堂が日本館のモデルに決定するのは、敷地獲得後、東京美術学校が取調書を上申する3月8日までの間と考えられる²¹⁾。しかし、この後も金閣寺のままで報道されていたのは、日本館の内容が確定する6月末までは事務局よりモデルについての発表が無く、敷地や施工会社などの情報だけが発表されるだけであつたため、それらを報じるためにかつて入手していた情報をもとに日本館のモデル名を記事に付け足していたと考えてよいであろう。

IV. 三時代の表現と岡倉の日本美術史思想

先に見たように、当初の時点では日本館を室町時代の建築様式で建てようとしていたが、それが美術的に優れたものであつたことから、計画は変更され拡大していった。しかし、その建築が美術的であることが、複数の時代表現に直接つながるものではない。これより、変更理由及び表現することになった時代の選択理由を、岡倉の日本美術史思想を踏まえて探してみたい。

IV-1 岡倉の日本美術史観

岡倉の『日本美術史』は、絵画や彫刻を主たる対象としたものであるが、その中で文学や建築について触れられることもあり、芸術一般の時代特性について述べたものと捉えることも可能であろう。

岡倉は日本美術の歴史を大きく「上古」「中古」「近世」

表 岡倉の『日本美術史』における歴史区分

上古 奈良朝時代	推古帝時期	第一期 第二期
	天智時期	
	天平時期	
中古 藤原氏時代 （平安朝）	弘仁時期	延喜時期 源平時期
	藤原時期	
	鎌倉時期	第一期 第二期
近世 足利氏時代	東山時期	寛永時期 寛政時期
	豊臣時期	
	徳川時期	

の三つに分け、それぞれをまた三つの時期に分割し、場合によってはさらに二分割している²²⁾（表参照）。

また、日本美術の特徴の一つに「変化に富むこと」を挙げ、三時代の精神と表現を、「上古」は「理想的」で「壮麗」、「中古」は「感情的」で「優美」、「近世」は「自覚的」で「高淡」としている。

精神上より云へば、奈良朝の理想的なる、平安朝の感情的なる、足利の自覚的なる、之れを其の形に現はれたるところより論ずれば、壮麗、優美、高淡の三大変化を有す。

『日本美術史』「総叙」（以下は同書の章名だけを示す）

これらの時代区分の中で、美術が最高に発達していたのは「天平」「延喜」「鎌倉」「東山」の四期としていた。

此の中に於て、最高点に達せしは天平、延喜、鎌倉、東山なるべし。[同上]

そして、それぞれについては以下のように述べている。

「天平」については、

天平時期に至りては奈良美術は極点に達せり（略）[同上]

として、「上古」の最高点にあつたとしている。

「延喜」については、

支那に則ることなく、旧来の文化を消化して日本的となりたり（略）

純然たる日本風を帯びたること（略）

延喜美術は優美なり（略）[「平安時代」]

として、延喜以前の文化を消化した結果、純粋な日本性を得て、「中古」の特質である「優美」を持ったとしている。

「鎌倉」については、「平安時代すなわち藤原時代美術」には「剛健優美の二性質ありて相並びしこと」として、藤原氏の盛時には優美に傾いていたが、保元平治の乱以降、剛健の機運を生じ発達した結果、

鎌倉時代に至れば、率直剛健の一時代をなしたり。然れども此の一時代は藤原時代残余の美術此に発達せりと見て可なり。（傍点筆者）[「鎌倉時代」]

としている。すなわち、「藤原の盛時」とは異なる特質である「剛健」を持っているとしている。

「東山」については、

足利時代最盛の期なり。[[足利時代]]

として、「近世」の最高点としている。

これより、この四期のうちで「天平」「東山」はそれぞれ「上古」「近世」の二時代を代表するものと考えてよい。

「延喜」「鎌倉」については、いずれも「中古」に属するものであるが、この時代の特徴は「延喜」に現れており、「鎌倉」は「藤原時代残余の美術」が発達したものと見てよいと述べていることから、「中古」時代を代表するものは「延喜」としてよいであろう。

一方、鳳凰殿との関連で『日本美術史』を見る場合、「日本性」と言う点が重要であるが、これは「上古」の「天平」には既に存在したとしている。

推古時代に於て入りたる新風は、此の時代に至りては、化して日本風となりて進歩せり。[[天平時代]]

しかし、これについては以下のようにも述べている。

天平、固より純然たる日本風なれども、其の之を表す方法は延喜を以て一層日本的なりとす。[[平安時代]]

これより、岡倉は日本性については「天平」「延喜」が同質でありながらも、「延喜」のほうがより日本的であると考えていたと思われる。

さらに、日本性は各時代に存在しているとしながらも、最も醇乎たる日本風は延喜時代に胚胎したるものにして(略) [[平安時代]]

と述べ、「優美」ということについては、

日本的のものと謂へば、この種のもの(※)を指さざる可からず。(※→「優美」のこと、筆者註) [同上]

とするなど、岡倉は日本美術の全歴史を通じて「延喜」を最も日本的と考えていたと思われる。

これより、岡倉が日本性の点で「天平」「延喜」のいずれかを選ぶとするなら、後者であったと推測できる。

「東山」時期を含む「近世」の日本性については、以下のように述べている。

奈良朝の壮麗、藤原時代の優美、以て外国に比すべきものあり。(略) 独り我が足利氏時代(略) 比すべきものあらず。 [[足利時代]]

これは「近世」が持つ「高淡」の表現を指しているのであるが、外国には存在しない日本独自のものであるとしている。また、

西洋人が現今の日本美術を以て淡白なりと評するは、此の高淡に原くものにして、邦人と雖ども中世以前に在りては壮麗優美の性質に富みたりしが、四百年前、足利氏時代の為めに感化せられて高淡となれり。 [同上]

としており、外国人から見た現在の日本美術の表現は、「近世」のものに由来し、「近世」になって初めて「高淡」の性質を得たとしている。岡倉はこの原因を鎌倉時代の

禅宗の輸入にあるとしていた。

これより、岡倉は「近世」の日本性はそれ以前に見られない独自のもので、外国人にとって「日本」を最も感じさせるものであると考えていたことになる。

よって、岡倉は「東山」の美術を形態的に優れているだけでなく、それ以前に見られない日本性を持つとしており、外国における日本性を示す場合には恰好の時期と考えていたと言えよう。

IV-2 三時代の表現

日本館で複数の時代を表現することへの変更は、日本美術の変遷を表現しようという意図のもとに行われたと考えられる。先に述べたように、岡倉は『日本美術史』の中で、日本美術の特徴の一つに「変化に富むこと」を挙げ、各時代の精神と表現を述べた後に、

同一種族にして此の三者²³⁾を具備するは世界其の例を見ざる處、以て大和民族が美術思想に富めるを証すべし。

と述べ、さらに、

独り我が人種に限りて此の三大変化²⁴⁾を有するは、甚だ能力の特絶なるを証すべく、以て万国に誇るに足れり。

とするなど、これを世界に誇る日本人の特質としている²⁵⁾。これより、岡倉がシカゴ博という機会を捉えて、この世界に誇る日本美術の特質を表明しようとしたとしても不思議ではない。そのためには、少なくとも三時代を表現する必要があった。日本館で三時代を表現することを提案した人物が誰であるかを知る史料は現在まで発見されていないが、岡倉は前稿で述べたように美術出品の分類変更の提案をするなど、積極的に日本美術の地位向上に努めていた。これより、日本館が室町時代の様式で建てられることになった時、それが美術的であることに注目して、岡倉が複数の時代を表現することを提案した可能性は高い。その場合、岡倉が表現しなければならなかったのは、少なくとも三時代、それも奈良・平安中期・室町の各時代であったはずである。

IV-3 三時代の選択

ところが、実際に表現された時代は、岡倉が望んだ三時代そのものではなかった。計画を変更し複数の時代を表現しようとしたことは、全く美術的な動機であったが、現実には政治的要因が時代選択に入り込む事になったのである。各時代が選ばれた理由は『報告書』には述べられていないが、久留の「演説」から知ることが出来る。

先の引用文にあったように、当初の段階で室町時代の建築様式で日本館を建設しようとしたのは、コロンブスのアメリカ大陸発見四百周年を記念するというシカゴ博の開催目的に起因するものであった。すなわち、コロンブスがアメリカ大陸を発見した当時のものを出品しようというもので、室町時代の美術史的評価とは無関係な動機であった。この後、室町時代の建築が美術的なものであることにより計画は変化してゆくが、このような政治

的要因が室町時代を選ばせた理由の一つであった。

江戸時代についても、シカゴ博がアメリカで開催されるものであることから、日米の友好を記念して選ばれている。すなわち、日本とアメリカが初めて条約を結んだ時代を表現しようというものであった。

此足利氏ハ凡ソ五百年頃²⁶⁾藤原氏ハ八百年前徳川氏ハ始メテ
亜米利加ト條約ヲ結ンダノガ嘉永安政ノ頃ノ風ガヨカロウ其
時代ノモノヲ取ツテ計画シタラメッボウ宜カラウト云フノデ
其頃ニ極リマシタ

〔久留前掲「米国博覧会へ出品ノ鳳凰殿ニ付イテ」〕

ところが、『報告書』では江戸時代を表現した棟のモデルの時期は「八代将軍ノ頃」としており、久留の述べた時期と異なる。よって、「嘉永安政ノ頃」の建物を出品しようとしたことは、江戸時代を表現する契機となつたのであって、現実には美術史的評価から八代将軍の時期を表現することになったと考えられる²⁷⁾。

このように、室町や江戸時代の選択には政治的要因が働いていたが、平安中期についてはアメリカとの関係が考えられず、三時代を表現することになった本来の美術的な目的から選ばれたと考えられる。

そこで問題となるのは、平安中期に対する美術史的評価である。岡倉が高く評価していた三時代のうち、室町時代は既に政治的理由からも選ばれていた。残る二時代のうち、岡倉は「天平」よりも「延喜」を日本性の点で高く評価していた。よって、岡倉の美術史評価からは平安中期が選ばれるのは当然であった。

以上のように、表現された三時代が選ばれたのは、日本美術の変遷の表現という目的からだけではなかった。室町時代が美術史的評価だけで選ばれたのではないように、政治的理由で江戸時代が選ばれ、美術史的評価だけで選ばれたのは平安中期だけであった。

しかし、室町時代は、政治的理由が選ばれた契機であるにしても、日本美術の変遷を表すという美術的展示を導いた以上、美術史的評価からも選ばれたと考えてよい。江戸時代についても、政治的要因よりも美術史的評価を重視して表現する時期を変更している。このように、政治的理由から選ばれた時代は、日本美術の変遷の表現という、前橋で述べた鳳凰殿建設の目的を大きく阻害するものではなかった。

V. 日本館のモデルの選定

日本館のモデル候補に選ばれた古建築は鳳凰堂と金閣寺であった。モデル無しに三時代を表現しようとしたが、建築美を生み出すことが出来ず、九鬼の判断で古建築をモデルとすることになったのであるから、この点を重視してモデル選定が行われたはずである。これより、この二建物が選ばれた理由として、三時代を表現するのに適した構成を持っていたことが挙げられる。金閣寺は三層、鳳凰堂も三棟であり、構成的としてはいずれも三時代を

表現するのに都合が良いものであるから、モデル候補に選ばれたと考えてよいだろう。

しかし、これらは日本の古建築の中から漠然と選ばれたのではなかった。『報告書』では、日本建築がその美を發揮していたのは奈良時代に始まり、平安中期・室町時代に頂点を極めたとしている。

我国古来建築ノ精美ヲ盡シ雅巧ヲ致シタルハ天平ニ始マリ藤
原足利ノ二氏ニ至リテ極レリ

〔『報告書』第四章第二十款鳳凰殿〕

これら三時代が高く評価されているのは、岡倉の『日本美術史』と同じであり注目されるが、天平は「始マリ」で、平安中期・室町時代に「極レリ」としている以上、後の二時代をより高く評価していたと考えられる。これより、鳳凰堂と金閣寺は平安中期と室町時代の建物であることから選ばれたと考えられる。これを裏付けるものに先の久留「演説」がある。日本館のモデル候補に金閣寺と鳳凰堂が挙げたことから、久留はそれらを実地に見に行ったことを述べているが、その時に京都や大津近辺を訪れ、この二建物以外にもモデルとなる建築物を探したようで、そのことについて以下のように述べている。

外ニモ西京、大津辺ヲ見マシタケレドモ其時代ニ建テタ良イ
家屋ハ是レヨリ外ニハナイ（傍点筆者）

「其時代」とは、鳳凰堂と金閣寺が建てられた平安中期と室町時代と考えられるから、モデル候補となる「良イ家屋」をこの二時代から選ぶようとしていたことがわかる。すなわち、モデルの選択は、先に時代が決められていて、その時代の中で探した結果であった。

この二候補から、最終的に鳳凰堂が日本館のモデルに決まったのであるが、その理由として日本館の計画に当たっていた人々が平安中期を重視していたと思われる点は見逃せない。このことは図-1の平面で「藤原」時代のものが最も大きな面積を占めていたことに示されており、岡倉は『日本美術史』の中で「延喜」を最も日本のな時期としていた。よって、これが鳳凰堂をモデルに選んだ理由の一つになったと思われる。

また、久留は「演説」の中で敷地周囲との適合性を評価して、アメリカという山のない場所に建てるには鳳凰堂の方が相応しいとしている²⁸⁾。

金閣ト云フノハ山ニ倚リ水ニ沿フテアノ家ハ出来テ居ル（中
略）丸デ山水デ位置ヲ為シテ居ル是レヲ亜米利加ニ持テ往
クト水ハアルケド山ハナイ、^{ママ}から斯ウ云フ建物ヨリ平場ノ
建物ノ方が宜イ鳳凰堂ヲ見ルト成程鳳凰堂ハ良イト云フコト
ガ分ツタ即チ平場ノ建物デアツテ宇治ノ川ニ臨ンデ其家ハ美
術的ニ能ク出来テ居ル（以下略）

この他にも理由は考えられるが²⁹⁾、その最も現実的なものは、先に述べた敷地獲得の際に米国側から付けられた条件である。その条件とは低い建物であることで、モデル選択に於いて避けることのできない要因となったはずである。これより、金閣寺よりも低い建物である鳳凰

堂がモデルに選ばれやすい状況にあったといえよう。

Ⅵ. まとめ

シカゴ博以前の日本館と比較した時、鳳凰殿建設の建築史的意義は、それが本格的日本建築であったことだけでなく、古建築をモデルとして日本建築の歴史的様式を表現したことにあるだろう。

前稿で述べたように、九鬼や岡倉の国粹主義が鳳凰殿を本格的な日本建築にしていた。しかし、それだけでは古建築をモデルとし歴史的建築様式を表現することにはならない。すなわち、単に日本的なものを表現するだけであるならば、当時の本格的和風建築を建てればよかったはずである。しかし、それでは「面白クナイ」と判断したことにより歴史的建築様式を表現することになった。久留「演説」では、この時点で計画を進めていた人物の名は出てこないが、その後の進展からは、九鬼や岡倉らがこの判断を行ったものと考えられる。事実、実在の古建築をモデルとすることを提案したのは九鬼であった。また、岡倉は当時自らが校長であった東京美術学校で、日本美術の伝統を踏まえた上で、新しい日本美術を創造することを生徒たちに求めているなど、彼が歴史を重視していたことは先学による多くの論考で確かめられている。このように、九鬼や岡倉らを始めとする日本館の計画を進めていた人物が歴史を重視していたという、いわば歴史主義ともいべきものが、歴史的建築様式を表現するという判断を導き、その結果、鳳凰殿の建築史的意義を高めることになったといえてよいであろう。

歴史的様式を室町時代のものにしようとしたことは、日本美術の変遷を表現することを導いた。複数の時代表現を提案した人物を知る史料はないが、その美術史思想から岡倉であった可能性は高い。この時、岡倉は世界に誇ることの出来る日本美術の特徴である「三大変化」を示すために、表現する時代として奈良・平安中期・室町の三時代を考えていたはずである。

ところが、実際に表現された時代の選択には、万国博の開催目的や日米の外交といった政治的要因が影響していた。この点は、鳳凰殿が万国博で建設される日本館である以上、宿命的と言えるであろう。しかし、岡倉が望んだ平安中期と室町時代は選ばれ、江戸時代についても政治的理由から表現されるはずであった時期から、より美術的であった時期に変更されており、岡倉の構想が大きく阻害されることにはならなかったと思われる。

鳳凰堂と金閣寺が日本館のモデル候補に選ばれた点は、三時代の表現という計画的な理由に基づくものであるが、より重要な点は、モデルが日本建築の全時代から選ばれたのではなく、平安中期と室町時代という特定の時代から選ばれていたということである。鳳凰殿の建設に関係した人々の意識として、個々の古建築より時代表

現の方を優先していたことは注目に値する。

そして最終的に鳳凰堂がモデルに選ばれたが、その理由としては敷地交渉の段階で米国側から高層の建物を拒否されたことが大きい。この段階で米国側に金閣寺をモデルとした日本館を提示したことを示す確実な史料は存在しないが、交渉に当たった手島精一の伝記や当時の新聞などの資料からは、当初、金閣寺が鳳凰堂よりも有力なモデルであったことが伺える。金閣寺は日本建築の中で特筆するほど高い建物ではないが、三層構成であり、鳳凰堂と比べれば絶対的な高さは大きい。これより、鳳凰堂が高さの点でモデルとして選びやすいものであったと言える。また、岡倉を初めとする鳳凰殿建設の関係者が平安中期を高く評価していたことも重要である。

このように、政治的思惑や計画的制約が加わった結果、鳳凰殿は、岡倉を始めとする日本館計画に当たった人々が考えた日本建築や日本美術の粋を、理想的な形で表現したものとはまでは言えない。しかし、そこには岡倉らの美術史思想が反映しており、「万国博の日本館」という制約の中で、彼らの考える日本的な美を表現するものであったと言えよう。

註

- 1) 当時の資料では「藤原時代」「足利時代」「徳川時代」と表記している。
- 2) 拙稿「1893年シカゴ万国博における鳳凰殿の建設経緯について」『日本建築学会計画系論文報告集』（1991.11）
- 3) 九鬼隆一の日本美術史観については、シカゴ博当時のものではないが、明治41年に大阪ホテルで行われた美術講演の記録『九鬼男爵日本美術論』（非売品、明治41年）で知ることができたが、岡倉の『日本美術史』と対立するような点は感じられなかった。
- 4) 岡倉の「日本美術史」講義は、明治23年より3年間開講されており、本稿で使用了『日本美術史』は、『岡倉天心全集』第四巻（平凡社、1980年）所収のものである。これは、明治24年度の講義を記録した原安民筆記ノートを基にして、現存する他の資料などを用い、吉沢忠氏が吉田千鶴子氏の協力を得て校正編集したものである。
- 5) 伊藤正雄「福沢諭吉と岡倉天心・九鬼隆一をめぐる両者の立場について」『福沢諭吉論考』（吉川弘文堂、昭和44年）より
- 6) 石井柏亭『日本絵画三代志』（ぺりかん社、昭和58年、原出版昭和17年）から、岡倉に強い影響を与えたフェノロサと山高の間に絵画の制作の上で多少の軋轢があったことが知られるが、それがシカゴ博当時の岡倉と山高の関係に影響があったとは思われない。
- 7) 資料とした新聞は『読売新聞』『東京日日新聞』『郵便報知新聞』『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』である。ただし、大阪系の新聞は当時の通信事情からと思われるが、記事が東京のものに比べ二三日遅れていることが多く、日付については東京系のものを重視した。
- 8) Okakura Kakuzo, Director of the Tokyo Fine Art School : THE HŌ-Ō-DEN (Phoenix Hall) An Illustrated Description of the Buildings Erected by the Japanese

Government at the World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago, K. Ogawa, 1893

- 9) 【報告書】第四章第二十款鳳凰殿には、「其面積ハ中央約ソ二十坪左右各々十坪許リナリ」とある。
- 10) 屋根葺材を銅板とした理由は、三棟で統一した表現とすること以外に、鳳凰殿がシカゴ市に寄贈されるものであることから、耐久性のある材料を求めた結果であったことも、久留の発言の中にある。
- 11) この講演が行われた日時は、これが掲載された【工学会誌】(M 26.10)には記載されていないが、その内容から見て明治25年7月15日に工学会通常会で行われた久留の演説「シカゴ博覧会ニテ建築ノ日本家屋」と考えられ、同誌に掲載される時点で改題されたと思われる。
- 12) 「徳川」時代の部分が二つに分割されていたのは、「男子」と「女子」の空間を表現するためであった。
- 13) この案を見て、久留は「此位ノモノデ宜カラウト云フノデ極ツタサウデシカカ元ヨリ白人ノ考デ戸ヲ揚ゲテアル其御隣リハ丸柱デ丸木ノ椽側ヲ付ケル其徳川ノ大名風ノ建築其又隣リハ神社ノ額堂見ル様テマルデ刺身ノ脇ニ以テ往ツテ館テモ附ケルヤウナ工合デ誠ニ面白クナイ」と述べている。これより、久留がこの案の作成に参加していなかったことがわかり、またこのような詳しい説明をすることができたことから、これがかなり具体的な段階にまで進んでいたことがわかる。
- 14) 明治24年12月3日の衆議院予算委員会で「政府委員」がシカゴ博で建設予定の日本館の計画内容を説明しており、同委員会主査の小間肅が、翌日の衆議院通常会で、そのことを報告している。小間のこの報告から、この時には日本館が「藤原」「足利」「徳川」の三時代を表現し、金閣寺か鳳凰堂のいずれかを模したものとなる計画であったことがわかる。
- 15) 手島工業教育資金団【手島精一先生伝】(非売品、昭和4年)より
- 16) 【東京芸術大学百年史】東京美術学校篇第一巻(ぎょうせい、昭和62年)第三章草創期 所収
- 17) 【故正員工学士久留正道君略官歴】『建築雑誌』(T 3.5)より。なお、このことを伝える記事は当時の【官報】には掲載されていない。
- 18) 以上は、何れも【報告書】第四章第二十款鳳凰殿の記述による。
- 19) 先に挙げた【読売新聞】明治25年2月26日の「宇治の鳳凰殿」は日本館のモデルを鳳凰堂としているが、同紙もこの日以後の日本館を扱った記事では他紙同様に金閣寺をモデルとしている。
また、日本館のモデルが金閣寺から鳳凰堂に変更されたことは、後で述べるように【東京日日新聞】だけが他紙よりも早く、同年6月25日の記事で報じている。
- 20) 米国側の委員は金閣寺を「聖ゼームス^{チャーチ}寺」ほどの広さがあり、高さがエッフェル塔ほどもあると誤解したとしているが、真偽のほどは疑わしい。
- 21) ただ、このモデルの決定が米国側との交渉終結により直ちに行われたものであるかは定かでない。米国側の条件は高い建物でないということであり、また、後で述べるように久留は全く別の条件から鳳凰堂をモデルとしたと述べていることから、金閣寺をモデルとして低い建物を計画したが、それではうまくゆかず、それにより、鳳凰

堂に変更したことも考えられる。

- なお、久留は「演説」のなかで日本館のモデル選定にあたって自らも出張して金閣寺や鳳凰堂を見たことを述べている。しかし、当時の【官報】「官吏発著」によれば、明治24年10月から翌25年9月までの間に久留が京都に出張したのは、25年3月末から5月中旬にかけて第三高等中学校に関係したものである。この時にそれらを見たのであれば、モデル決定後の事後確認であったことになるが、後で述べるように、久留はこの時にモデル候補となる他の建築物も探していることから、この出張は先の日時以前と思われる。久留は明治25年2月6日まで文部省から「非職」を命じられており、この時に京都へ赴いた可能性は高い。
- 22) この時代区分は、【日本美術史】の最後の章である「総叙」において行われたもので、「推古以前」の章で行われた時代区分よりも詳しく分けられており、各時代の名称も異なるものがある。岡倉は日本美術史を体系的に編んだ最初の人物として知られているが、このような点にも開拓者ならではの不安定さが見られる。
 - 23) 「此の三者」とは、「上古」の「理想的」、「中古」の「感情的」、「近世」の「自覚的」という精神のことを指している。
 - 24) 「此の三代変化」とは、「上古」の「壮麗」、「中古」の「優美」、「近世」の「高淡」という表現上の変化のことを指している。
 - 25) いずれも、【日本美術史】「総叙」より
 - 26) 室町時代の建物のモデルとなったのは、前述のように銀閣寺であった。しかし、これは15世紀末のものであり、「五百年頃」前という久留の知識は誤っていたことになる。ただ、これが金閣寺を指しているならば、食い違いは生じない。先に述べたように、金閣寺から鳳凰堂へのモデル変更があり、久留の認識に混乱が生じていた可能性はある。
 - 27) 岡倉や彼に影響を与えたフェノロサは、明治初期の日本美術を高く評価しておらず、このことが彼らに日本美術の近代化を推進させたことは多くの先学により確かめられており、嘉永や安政といった幕末の日本美術についても同様の評価であったと考えられる。ただ、「八代将軍ノ頃」とは享保年間を指すと考えられるが、この時期の日本美術を岡倉がどのように評価していたのかは【日本美術史】やその他の資料からは正確に知ることは出来ない。【日本美術史】の時代区分では、享保間は「徳川時期」の第二期である「寛政時期」に入るが、この時期の美術的中心地を京都としており、江戸はこの時期も第一期である「寛永時期」の勢いに支配されているとしていた。これより、幕末よりも時間的には「寛永時期」に近い享保年間を、美術史的により高く評価していたと考えられる。
 - 28) しかし、このことは註21)で述べた出張の際の意見であるから、出張の日時と共にこのことがモデル決定の理由の一つであるのか、議論の余地は大きい。
 - 29) その一つに見学方法がある。金閣寺は三層構成であり、これをモデルとした場合には、時代分けをした展示は上下に積み重ねる形式になり、内部に階段を設けて見学用の動線を作らねばならず、室内に見学者を入れざるを得ない。しかし、鳳凰堂をモデルとした場合は、三棟構成

であるから展示は平面的に広げることができ、見学者を室内に入れずにすむ。事実、鳳凰殿の見学は建物の周囲に巡らせた縁から行わせ、室内に見学者を入れないようにしていた。これより、見学方法という計画的な面から鳳凰堂が選ばれた可能性はある。

また、鳳凰堂と金閣寺がモデル候補であった時点で日本館の費用は決まっていたから、予算的な問題が鳳凰堂をモデルとする理由の一つとなったことも考えうる。

(1991 年 12 月 9 日原稿受理, 1992 年 2 月 4 日採用決定)